

平成 18 年度 修士課程学位論文要旨

学位論文題名（注：学位論文題名が欧文の場合は和訳をつけること）

保存的療法を継続中の女性変形性股関節症患者の QOL に関する横断的調査研究
—患者団体の会員に対するアンケート調査—

学位の種類： 修士（理学療法学）

保健科学研究科 理学療法学 専攻 学修番号 05854603

氏名： 地神 裕史

（指導教員名： 池田 誠 教授）

注：1,000 字程度（欧文の場合 300 ワード程度）で、本様式 1 枚（A 4 版）に収めること

【背景】保存的療法を継続中の変形性股関節症（変股症）患者に対する運動療法や医師・PT の関わりを QOL という視点で評価している報告は少ない。

【目的】保存的療法を継続中の変股症患者の QOL を調査し、運動療法や医師・PT の関わりの重要性を QOL という視点から検証することを目的とした。

【対象】変股症患者団体に所属し保存的療法を継続している女性変股症患者 70 名（55.6±10.0 歳）を対象とした。

【方法】SF-36 とアンケート用紙による郵送調査を行ない、結果を統計学的に解析した。

【結果】病期の進行に伴い SF-36 下位項目の身体機能・日常役割機能（身体）と身体的健康度（PCS）の得点は減少したが、精神的健康度（MCS）やその他の下位項目の得点にこのような傾向は認められなかった。片側両側群における PCS・MCS の得点に有意差は認められなかった。また、全対象者の PCS・MCS の得点が平均値よりも高いか低いかを従属変数、アンケート項目のダミー変数を独立変数としたロジスティック回帰分析から PCS と MCS に影響を与える因子として「病期」と「運動療法の有無」、「運動療法の有無」と「医師や PT からの指導経験の有無」が各々抽出された。（ $p < 0.05$ ）

【考察】変股症の保存的療法の限界や手術の適応に関する研究は多数報告されているが、痛みや画像診断の結果で評価している報告が多い。しかし、変股症の保存的療法の継続には精神的な面のサポートが必要不可欠であり、従来は医師や PT が適切な評価に基づいたアドバイスを与えることでその役割を担ってきた。しかし、このような精神機能や QOL は定量的に評価されることなく、保存的療法の効果や限界について議論されてきた。今後、身体機能のみならず精神機能や QOL を定量的に評価した上で保存的療法の効果や限界について検証することが EBM に基づいた医療につながると考えられる。本研究の結果から、運動療法の有無は PCS・MCS に影響を与える因子であり、医師や PT からの指導の有無は MCS に影響を与える因子であることが明らかとなった。変股症の保存的療法には身体機能のみならず、精神的サポートや QOL の維持・向上が重要であり、医師や PT がその役割を担っていくことは、QOL という視点から見ても有用であると考えられる。

【限界と課題】変股症患者団体の患者を対象としたことや、対象者数が少なかったことは本研究の限界であり、今後の課題である。

【結論】QOL という視点から変股症の保存的療法における運動療法や医師・PT の関わりの重要性が示された。